

小-18

顕著な再生像を認めた非再生性免疫介在性貧血の犬の1例

○新井田 篤¹⁾ 玉本隆司¹⁾ 足立真実¹⁾ 五十嵐寛高²⁾

1) 酪農大伴侶動物医療学 2) 酪農大生体機能学

【はじめに】非再生性免疫介在性貧血 (NRIMA) は、骨髄における好塩基性赤芽球から多染性赤血球までの段階の破壊を特徴とする免疫介在性血液疾患であり、骨髄中で破壊されるため末梢血においては非再生性貧血を呈する。今回、NRIMA と診断したものの、治療開始後早期と再発時に顕著な再生像が認められた症例を経験したので、その概要を報告する。

【症例】ウェルシュ・コーギー・ペンブローク、4歳齢、避妊雌。約3日前から活動性の低下が認められ、重度の貧血が認められた。貧血の精査を目的に本学附属動物医療センターに来院した。初診時の血液検査にて重度の貧血 (Hct13%) が認められ、血液塗抹にて赤血球の大小不同を認めたが、多染性赤血球および網状赤血球は認められなかった。また、球状赤血球は認められず、クームス試験は陽性であった。骨髄吸引検査を実施したところ、赤芽球系が過形成であり、分化異常は認められなかった。また、骨髄球系および巨核球系に明らかな異形成所見は認められなかった。骨髄所見より NRIMA と診断し、第2病日よりプレドニゾロンで治療を開始した。また、第5病日からシクロスポリンを併用した。その頃より有核赤血球が認められるようになり、第13病日には多数の多染性赤血球と有核赤血球が認められ、網状赤血球数も42万/ μ lと顕著な再生を呈していた。その後、第27病日にはHct37%と正常範囲に入り、以降正常範囲を維持したため、薬を漸減した。貧血のコントロールに伴って再生像は認められなくなった。しばらく良好に維持されていたが、第366病日にHct25%と低下した。他の要因もないためNRIMAの再発と考えられたが、多染性赤血球と有核赤血球が認められ、再生性貧血を呈していた。寛解再導入を行ったところ貧血の改善が認められた。第401病日現在、良好にコントロールされている。

【考察】通常、NRIMAは非再生性貧血を呈するが、本症例においては治療開始後と再発時に顕著な再生像が認められた。本症例の病態は、骨髄像より多染性赤血球での破壊と考えられる。しかし、溶血所見こそないが、限りなく免疫介在性溶血性貧血 (IMHA) に近い病態であると推察される。NRIMAには、いずれの分化段階が標的になるかにより、赤芽球癆に近いものからIMHAに近いものまで様々な病態が含まれており、血液像や治療反応性の違いを生んでいる可能性が示唆された。